
日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第 2 1 号

<目次>

理事長挨拶 1

特集 第 13 回学術大会を振り返って 2

台湾研究情報 13

日本台湾学会活動報告 16

理事長挨拶

第七期理事長就任にあたって 山口守（日本大学）

1998 年の設立大会以来、日本台湾学会は会員数が年々増加し、現在は 500 名を超える規模の学会へと発展しています。新世紀の始まりに先駆けて発足した新しい学会の急速な発展を支えてきたのは、ひとえに会員のみなさんの台湾研究への熱意と学術的実践そのものです。今期理事会の責任者として、従来築き上げてきたその貴重な財産を受け継ぎ、学術活動の更なる発展を図ることが責務であると改めて認識しているところです。

学会規模の拡大に伴って業務も増える傾向にあり、増大する仕事量の適正化を図るため、今期から理事の人数を 10 名増やして 30 名としました。この中から更に 10 名の常任理事を選出して、学会の日常業務にあたっています。学会ホームページを参照していただければ分かりますが、他にも多くの会員に様々な業務をお願いしています。こう

した方々の協力を得ながら、会員のみなさんの学術研究の交流、討論、集約の場として学会が機能するよう図っていくつもりです。また学会規模の拡大に伴い、学術的公共空間の整備が必要となっています。それにはまず情報公開を促進し、運営実態の透明度を高める必要があります。当面まず常任理事会審議内容を理事会全体で共有化することや、ホームページ及びニュースレターを中心にいっそう積極的に情報発信していくことを考えています。

ところで、理事長就任後、挨拶や説明をさせられる機会が増えたためか、このところ台湾研究とは何かと考えることが多くなりました。本質主義からではなく、また概念化志向でもなく、自分が行っている台湾研究の足下を見つめ直す意味からなのですが、特に台湾研究に固有性はあるかという問いにどう答えたらよいかをよく考えます。暫定的に「固有性はある。ただし、それは多様性、多元性という非固有的特性である」という自己撞着のような回答しか思いつきませんが、実はそれが台湾文学を研究している自分自身の実感でもあります。以前ある文章で書いたことですが（『私の台湾文学研究クロニクル』（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 11 号、2008）、私はまるで歴史空間を時間旅行するように、中国現代文学研究から出発して台湾文学研究へ辿り着きました。1980 年代半ばに初めて台北を訪れて、街に溢れる繁体字の看板を目にした時、まるでデジャヴのように民国期上海の街角を歩いている気分になりました。また台湾南部で先住民族の老人が話す日本語を聞いて、胸に痛みを感じながら戦前期日本にタイムスリップしたような感覚を覚えました。民

国期上海も戦前の日本も知らない私がそのように感じたのは、恐らく画像化された歴史を旅したような気持ちになったからでしょう。その後も台湾へ行くたびに、過去と現在を接合する旅行を続け、やがて今を生きる台湾の人々と向き合うためには深い歴史認識が必要であることを強く感じ、少しずつ歴史を勉強するようになりました。こうした学習過程を表すように、私個人が所属するいくつかの学会の学術領域も、中国や台湾やアジア、或いは文学や社会と多岐にわたっています。

日本台湾学会所属の多くの会員も恐らく同じように様々な学会に所属し、自分固有の研究領域を持ちながら、同時に日本台湾学会の学術空間にその成果を開示、交流、討議しているのだと推測します。日本台湾学会が、文学・言語・歴史・政治・経済・社会・人類など様々な研究領域の研究者が集まり、また台湾・日本・中国・韓国/朝鮮・欧米など多くの地域研究が交差する場として機能しているからこそ、それが可能なのでしょう。「言説の多様性の中で語る主体がもちえた様々な位置と機能を明確にする」(ミシェル・フーコー『知の考古学』)ことが可能な学術空間として、ひとつの国家やひとつの学術領域を枠組みとする学会とは大きく異なる超域的特性がそこに見られます。それが日本台湾学会の活気と熱気を生み出している大きな特徴であり、発展の基本条件ではないでしょうか。今期学会運営にあたって、その特徴を最大限に生かす方法を模索しながら、常に自由で、新しい研究が創出できる基盤作りに努めていきたいと考えています。(2011年7月15日記)

特 集

第 13 回学術大会を 振り返って

本号は、2011年5月28-29日に早稲田大学にて開催された日本台湾学会第13回学術大会の特集号です。

なお、企画分科会は企画責任者、自由論題分科会は座長の方に内容や討論の概要を執筆していただきました。

第 13 回学術大会を振り返っての感想 大会実行委員長 梅森直之(早稲田大学)

日本台湾学会第13回学術大会は、2010年5月28日と29日にわたり、早稲田大学において開催されました。本学術大会が、早稲田大学で開催されるのは、今回が初めてであり、また、久方ぶりの2日間にわたる大会でもありました。能力や経験の不足に由来するさまざまな不行き届きがあったことと思いますが、ともかくも、こうして、無事に予定されたスケジュールを終了することができましたのも、会員の皆様のご協力をいただいたがゆえのことです。実行委員会を代表し、この場をお借りして、すべての会員の皆様に、深く御礼申し上げます。また、大会全体にわたる総括は、とても私の手に負える仕事ではないので、ここでは、私がもっとも深く関与した、初日の記念講演「ベネディクト・アンダーソンとの対話」を中心に、若干の感想を記すことで、その任に代えさせていただきたいと思います。本記念講演は、まずアンダーソン教授に、基調報告をいただいたのち、呉叡人さんと私がそれにリプライし、引き続き会場からの質疑応答を受けるという形式でおこなわれたものでした。

学術的な活動というものもまた、それが人間の営みであるかぎり、社会的なコンテクストの影響を完全に排除することはできません。日本台湾学会がおこなったこれまでのすべての学術大会もまた、その意味で、その時代時代の刻印を、強く受けてきたのだと思います。しかし、今回の学術大会を振り返るにあたり、とりわけそうした思いを深くもつ理由は、本学術大会が、2011年3月11日に発生した、東日本大震災以後の、最初の学術大会となったからです。震災後、実行委員会ですら議論になったのは、そもそも本学術大会を、スケジュールどおりに開催することが可能かどうかという問題でした。地震そのものの影響に加え、何よりも福島原発事故の推移が不透明でした。会場となる早稲田大学では、早々に授業開始予定を一ヶ月間繰り下げる決定を下していました。基調講演者として、ベネディクト・アンダーソン教授をお招きしていたことも、心配のひとつでありました。「本当に開催できるのか?」、「開催したとして、本当に人が集まるのか?」。これは、実行委員会のみならず、会員の皆様、すべてが一度は自問した問いなのではないでしょうか。

東日本大震災は、学術大会に、ひとつの切断を導入したように思います。通常わたしたちは、学会活動というものを、ある種のルーティーンワークとしておこなっています。時期が来たので、学

会を開き、それに出席するという具合に。しかしながら、大震災によってもたらされた不安的な状況（大会は開催されるのか？それに出席できるのか？）は、通常そうしたルーティーンに埋もれている原初的な問い（なぜ大会は開催されなければならないのか？）を露呈させたように感じられました。こうした切断は、結果的に、会員個々人に、台湾を研究することの意味を、あらためて考えさせる効果をもったのではないのでしょうか。

アンダーソン教授の基調報告に引き続く、呉毅人さんのリプライは、こうした切断の意味を明確化させる、きわめて力強いものでした。呉さんは、アンダーソン教授のグローバルな比較歴史という方法論が、台湾に対して提示するきわめて両義的な政治的意味を明確化しました。すなわちそれは、台湾をグローバルな視野からとらえ直すことにより、「祖国（台湾）」や「帝国（中国）」というパロキアルな亡霊から台湾人研究者を解放する契機を秘めながらも、同時に、その地政学的重要性を明確化することより、永遠に帝国の周縁に幽囚されざるをえない台湾の運命をも映しだすものだと言ったのです。この隘路から抜け出す可能性を、呉さんは、アンダーソン教授のアドヴァイスに従って、台湾における「傲慢でないnon-arrogant 自己理解」という知のあり方に求めてゆきます。そして日本における台湾研究を、台湾人が、この「傲慢でないnon-arrogant 自己理解」を獲得するための、かけがえのない場であると意味づけていったのです。そして呉さんのリプライは、日本の台湾研究者に対する問いかけをもって終了します。「では、日本の台湾研究は、日本にとってどのような意味をもっているのか？」

呉さんのリプライが、アンダーソン教授の方法論の知的側面に焦点を合わせたものであったのに対し、私自身のリプライは、その方法論に込められた感情的側面を問題化するように努めました。アンダーソン教授は、1998年に、アジア学会の生涯功労賞の受賞スピーチにおいて、地域研究を専門研究から分かつキーワードとして、「感情的結びつき emotional attachment」という用語を使用しています。感情とは、一般的に言って、社会科学の分析的知の枠組みとは折り合いの悪い対象です。また、感情は、とりわけナショナリズムをはじめとする政治的局面では、さまざまな暴力を誘発する危険な要素でもあります。私は、そうしたことがらを知り抜いた教授が、それでもなお「感情」をみずからの方法に取り入れる、その意味を考えたいと思いました。

教授はしばしば、台湾をアイルランドになぞらえて説明することがあります。私はそのたびに、



▲ 記念講演の様子

教授の、台湾を自分の祖国と重ね合わせて理解しようとする、台湾への深い emotional attachment を感じないわけにはいかないのです。また、呉さんも触れたように、この大震災を契機として、台湾からは、5月上旬までに160億円を超える突出した額の義援金が日本に寄せられました。おそらくは専門家ですら、誰もが予想できなかったこれほどの規模の運動の背景に何があるのかは、日本のそれに対する応答責任の問題も含めて、台湾の一般の人々の emotional な次元へと分け入った、注意深い議論を抜きにしては解明できないように思うのです。最後に、私個人といえば、emotional attachment という言葉を、原発事故との関連で、ひときわ苦い思いで受け止めざるをえませんでした。もしも福島という地域に、その風土やそこで暮らす人々や動物や植物のすべてに、もっと多くの人々が emotional attachment を持つことができていたら、少なくとも原発事故の発生とそのなりゆきは、いまとは大きく違ったものになっていたにちがいないと感じざるをえなかったからです。

基調講演に続く質疑応答の場面でも、大震災を契機として露わになった台湾と日本との関係をあらためて考え直そうとする問いが会場から多く発せられました。そこで問い直されたのは、結局のところ、「地域」を研究することの意味であったように思われます。台湾にせよ、福島にせよ、ある「地域」を知ることと、その「地域」にかかわることは、どのような関係にあるのか。そしてその際に、「感情」が演ずる役割とは何か。私にとって、この第13回の学術大会は、こうした問いかけとともに、記憶に刻み続けられていくことになるのだらうと思います。

第1分科会

「美意識と歴史意識」

企画責任者：橋本恭子（日本社会事業大学）

第一分科会では、1930年代半ばから40年代にかけての「美意識」と「歴史意識」について論じたが、四論文に共通するのは、台湾人社会の本土化と在日日本人社会の土着化が同時進行した結果、日台文芸家双方に新たな「台湾認識」が生れ、それが美意識や歴史意識の構築に作用したことへの着目である。

まず、游勝冠（国立成功大学）の「風車詩社唯美文学路線の政治的意味」では、1930年代の風車詩社の再評価を行った。1995年に『水蔭萍作品集』が出た後、呂興昌や陳明台らが風車詩社とそのシュールレアリスムについて、反日本帝国の立場に立つ、進歩的な政治性を高く評価したが、游は反対に、風車詩社にはヨーロッパのシュールレアリスムが有していた政治的急進性が見えず、彼らの作品にはエグゾティスムやセルフオリエンタリズムが溢れていたと批判した。これに対し、コメンテーターの邱若山先生（靜宜大学）から游論文が実作を論じていない点が弱いこと、さらに、戦後、風車詩社の評価が高かった背景に、外省人が台湾の詩を中国からの移植であると主張したことなどが指摘された。

次に、橋本恭子「『台湾の美』をめぐる認識の変化—『台湾』の議論を出発点として」では、1940年4月創刊の総合歌誌『台湾』を対象に、1930年代半ば以降、在日日本人に芽生えた「台湾意識」の延長として、在日歌人が内地の歌人や台湾人文芸家を「他者」化しながら自分たちの主体性を立ち上げ、独自の「南方短歌」の創作に励み、「似非エグゾティスム」に陥ることを戒めながら、「南方の美」を追求したことが論じられた。邱若山先生および会場からは、内地人と台湾人に対する在日日本人の両義的な態度には、「二流」の日本人の屈折した心理が反映されているとのコメントがあった。また在日歌人の背景の調査が不十分である点、『あらたま』や『原生林』との比較が必要な点などが指摘された。

許倍榕（国立成功大学）「『文化遺産の再認識』について—『民間文学整理論争』をめぐる—」では、『先発部隊』の「台湾民間故事特集」（1935年1月）が引き起こした論争が、民間文学の再利用に関する「方法」ではなく、民間文学を評価する際の「価値」判断を問題にしていた点を明らかにした。つまり、近代文学の視点から民間文学の前近代性を批判的に見るか、「全民族の共同創作」という側面を評価し、知識人の文明観や審美観の

再検討を行うか、という価値観の違いである。座長・コメンテーターの松永正義先生（一橋大学）からは、日本の民俗学や北京大学の研究との関連についての補足、また文聯分裂について游勝冠論文との見解の違いをより明確に打ち出すべきであったとの指摘がなされた。

鳳氣至純平（国立成功大学）「書いたのは誰の歴史か？—浜田隼雄の台湾歴史小説研究—」では、在日日本人作家濱田隼雄の『南方移民村』を、まず「学としての歴史」、叙述としての歴史、「歴史教育」の領域における台湾史と対照させた上で、それが在日日本人の土着化という社会状況を反映させつつ、台湾人の存在を描かないことで、学術・教育の二つの場では言及されることのない庶民の「台湾史」を創造することに成功し、「国民の物語」とも一定程度の距離を置くことができたことと論じた。松永先生からは、台湾東部の植民が矢内原忠雄のいうイスラエル移民に重なる点が指摘され、会場からは、「国民の物語」はだめで、「庶民の物語」ならよいのか、という質問が出された。

以上の発表を総合すると、まず反省すべきは、同一セッションの横の議論が弱く、日台文芸家の美の表現や歴史小説の比較が十分になされなかった点である。一方、二セッションを縦に見ると、橋本論文と鳳氣至論文が在日日本人社会の土着化に重点を置いて、日本人作家が台湾の内部から歴史や美を描こうとした点を掘り下げたこと、游論文と許論文が台湾文芸協会と台湾文芸聯盟の齟齬、その後の文聯分裂の要因を異なる視点から描き出したことなど、ある程度成功したといえよう。なお、本大会直前に、游勝冠が健康上の問題で来日不可能となり、三名での発表には当初不安もあったが、会場の皆様から活発なご質問・ご意見をいただき、非常に有意義な分科会になった。皆様から心からお礼申し上げます。

第2分科会

「植民地と占領地・二つの地域の文学と〈戦後〉——台湾と『満洲国』」

企画責任者：和泉司（慶應義塾大学）

台湾文学研究の領域において、すでに日本語文学研究は特別なものではなく、当然そこにあるべきものとして存在するようになったが、一方で、「日本語文学」という視点から、台湾の日本語文学を相対化する作業は困難なものになっている。それは、日本語文学の「所在」が日本帝国の旧植民地・占領地や移民者の居住域など、アジア・世界各地に分散しており、それぞれの地域研究の中

で行われてきたからであり、またその地域研究の蓄積を背景としなければ、他地域の日本語文学を読みこむことが難しいからであろう。

しかし、「難しい」とはいえ、各地域の日本語文学を比較し、相対化することは、台湾の中の日本語文学を外部に開き、研究を発展させるためには重要な作業である。このような認識から、今回、台湾と「満洲国」とにおける、日本語が文学にもたらした影響と日本語文学の展開について取り組むため、まず台湾の日本語文学研究を行っている者として私、和泉司が企画を立ち上げ、「満洲国」の文学を研究されている岡田英樹先生にご参加いただき、本分科会を行うことになった。その際、さらに南北アメリカ大陸移民の日本語文学を研究テーマとされている名古屋大学の日比嘉高先生にコメンテーターとしてご協力いただいたことは、大変に有意義なことであった。

分科会では、まず私の報告〈「引揚者」にとっての植民地—西川満・引揚後の台湾表象を中心に—〉を発表した。この報告は、1940年代の台湾の文壇において独裁者のな力を持っていたとされる西川満が台湾からの〈引揚〉後、どのような台湾表象を行ったかを検証することで、戦後の日本社会において台湾表象が小説の題材としての価値を失っていく様子と、〈引揚〉後の台湾表象が、植民者としての責任を放棄したことを背景に成立していることを示した。岡田英樹先生による「『満洲国』における中国人作家の言語表現——日本語利用の問題をめぐる」では、中国人作家・古丁による日本文学テキストの中国語翻訳をとりあげ、その翻訳の中に日本語語彙を多数持ち込み、擬態語・擬音語も日本語の原音を残したまま漢字表記するといった、日本語の形や文脈を強引に中国語化した特異な文章を作り上げていたことを示した。そしてその特異な文章は、古丁の語学力の不足のためではなく、むしろその能力の高さ故に、日本語を借用することで中国語を豊かにしようという古丁の戦略であったことを指摘した。

さらに日比先生から、南北アメリカ大陸における日本文化・日本語文学の歴史と展開についてお話をいただいた。植民地・占領地ではなく、移民者として他国社会の少数者として生きていく中で、日本語文学は、やはり台湾、「満洲国」のそれとも大きく異なるもので、報告者にとってもフロアの参加者の方々にとっても意味あるものであっただろうと思う。

今回の企画の問題点があるとすれば、それは私の報告と岡田先生のご報告、そして日比先生のコメントの連関を十分に構築する準備がなかったことだ。二つの報告とコメントが、それぞれやや距

離を置いた形で提示されることになり、統一的なテーマの中で報告することができなかった。フロアからのご意見は各個的なものになってしまい、全体を通じてのご意見をいただくことや、また回答することもあまり出来なかった。そして多くの方にご参加いただいたにもかかわらず、質問を受ける時間も短くなってしまった。それも大きな反省点の一つである。ただ、日本台湾学会において、台湾以外の日本語文学に関する報告、コメントを得たことは有意義であり、またこの分科会から新たな研究者間のつながりを多少とも生み出すことが出来たと思う。それらの点を踏まえて、今後の研究にこの分科会の経験をいかしたい。

第3分科会

「台湾・南方はどう語られたか —徴用作家のまなざし—」

企画責任者：阮文雅（東呉大学）

「台湾・南方はどう語られたか—徴用作家のまなざし」というセッションを企画した目的は、時代の制約と国策としての新たな南方民族観の構築が要求される中、南方に徴用された作家たちがどのように台湾・南方を捉え、また帰還後どのように台湾・南方を捉え直したのかという点について、彼らの作品を通し、南方徴用作家の内面に交錯する変容を分析することであった。

本分科会のテーマにあう作家として、徴用作家である中村地平、丹羽文雄、そして、陸軍軍部の要請により特派員として活躍していた真杉静枝や佐多稲子ら四人を取り上げ、検討してみた。具体的に三つのテーマを組み、当時のマライ、台湾、中国広東に対する徴用作家の関心を、より複眼的な視点から研究報告を行った。

報告（1）阮文雅「徴用作家からみる南方民族認識—中村地平『マライの人たち』を中心に—」

阮文雅の報告は、マレーに報道班員として一年滞在した中村地平が帰還後に発表した作品『マライの人たち』の中に、周到な宣伝任務の遂行として植民地言説にコミットしながらも、矛盾するような個所が随所に見られるということに着目し、彼の台湾関連作品も視野に入れつつ、中村地平が南方民族に対してどのような認識を持っていたのかについて探った。そして、作品の平穏な風景の描写の背後に占領地の矛盾が満ちていたことや、自民族が他民族より優位に立つことに疑問を生じた徴用作家としての内心の軋轢が表面化されていたことなどを明らかにした。

報告（2）廖秀娟（元智大学）「台湾での旅から

みる徴用作家の台湾認識—丹羽文雄と佐多稲子の場合」

廖秀娟の報告は、戦時下の文芸講演会のために初めて来台した佐多稲子や丹羽文雄を研究対象として、「台湾の旅」と「台湾の息吹」を通し、徴用作家の台湾認識について論じた。佐多稲子の「台湾の旅」には、台湾が内地から流れてくる「都落ち」たちの異郷であったと描かれていると同時に、帝国の統治に「満足」している植民地の人々の姿も線たく打ち出されていた。そして、丹羽文雄の「台湾の息吹」には、魚雷、勤行報国青年隊、義勇隊など時局的な要素が多く書き込まれ、戦争体制に入った台湾像が色強く出された一方、作中にある小道具や植物の描写によって、植民地台湾が日本式な生活に順化されていく過程で試みた逆襲の一面もみせていた。

報告（3）林雪星（東呉大学）「真杉静枝からみる中国と台湾—『南方紀行』と『ことづけ』を中心に」

林雪星の報告は、真杉静枝の『南方紀行』と『ことづけ』を通して彼女が如何に台湾を見ているか、また、陸軍報道部の南支派遣軍慰問団の一員として、広東を訪問した経験を有した彼女が如何に中国をみているかという点から、中国像と台湾像を明らかにした。台湾の部分は、作品にある内地人の言葉のテンポ、内地人の女性像、台湾人像、果物などから幅広く検討されていたのに対して、中国の部分は、広東の乞食、宣撫工作に協力する親日中国人、停仔脚、広東に駐屯した日本の軍隊に焦点があてられ、論じられた。

コメンテーターは木村一信先生（プール学院大学、以下敬称略）と下村作次郎先生（天理大学）である。まず木村一信は、真杉静枝や佐多稲子、林芙美子など陸軍の要請で特派員として戦地慰問した作家は、召集令のもらった作家とは違い、準徴用作家としかいえないと、徴用作家の定義を説明した。そして、阮文雅の報告について、「マライの人たち」にある徴用作家帰還後の感想に着目したところはいいい視点であったと評価し、同じく淡々とした生活の中で当時のシンガポールを描いた井伏鱒二の「花の町」との比較が必須だと指摘した。更に、言葉の問題、特に英語をめぐる部分が極めて重要だとコメントした。廖秀娟の報告については、佐多稲子の台湾での日程が資料によって齟齬が生じることに意味があると述べ、諸資料を詳細に踏まえて論ずる必要があると指摘した。そして、作中にある「悲しい」「のどやかさ」「絵」などの言葉から論じたのはおもしろい視点であったとコメントを残した。最後、林雪星の報告に対し、真杉静枝について、彼女のような外地育ちの

経験を有する人は無意識に、言葉や、風土、そして果物などにも敏感であるという部分は新たな一つの視点になったと指摘した。

次は下村作次郎のコメントである。まず、台湾とかかわる四人の徴用作家の作品を多面的な観点からみようとするとところは、大きな特徴があり、意義深い企画で、今後も継承すべきだと評価した。そして、一人の日本の若手の立場、つまり日本人の立場から考える視点を加えると、更に良くなるだろうとアドバイスをした。それから、阮文雅の報告については、言葉の問題、特に英語の能力による「誇り」の動揺に着目した点はおもしろい分析だとコメントした。廖秀娟の報告については、「悲しい」「絵」「逆襲」などのキーワードから論ずるのは説得力があると評価した。また、「台湾の息吹」に登場した「周さん」「医学博士」は周金波と呉新栄であろうと指摘し、作家を突き止めたことによって違った読みが見えてくるというコメントをした。林雪星の報告については、言葉のテンポによって内地人の身分が判断できること、そして、真杉静枝の作品に出てくる内地人の女性は未亡人でも、台湾の嫁になっても健気な一面を持っているという指摘は的を得ており、内地人の土着化の問題にもかかわる重要な指摘だと述べた。最後に、フロアからも報告者に対して質問が飛び交い、報告者のみならずコメンテーターも含め活発な議論が行われた。（文責：廖秀娟）

第4分科会（開催校実行委員会企画）

「早稲田と近代台湾の交錯」

企画責任者：岡本真希子（国立成功大学）

大会開催校委員会企画「早稲田と近代台湾の交錯」では、早稲田大学という「場」、早稲田大学出身者という「人」などに着目し、本国（「内地」）と台湾が相互に交錯する結節点／発信地としての早稲田大学の存在を明らかにすることを目的とした。主な対象時期は1920年代～1930年代前半で、歴史学の方法を用いながら実証的な解明を目指した。

第1報告、紀旭峰会員（津田塾大学）「近代台湾の諸啓蒙運動と早稲田大学」では、早稲田大学の台湾人留学生と教員を通じて、早稲田大学と近代台湾の啓蒙運動とのかかわりにつき考察するもので、具体的には、早大台湾人留学生の主要な受け皿となった政治経済科のカリキュラム、早大教員による『早稲田学報』・『台湾青年』・『台湾』における論説、早大台湾人留学生による『台湾青年』・『台湾』への投稿と翻訳、雑誌『亜細亜公論』や

思想団体（新亜同盟党・コスモ倶楽部など）における在京アジア人留学生と早稲田大学台湾人留学生の関連・活動などを分析し、彼らのさまざまな「知の実践」を支える土台の一つが大学での「知の構築」であったことなどが明らかにされた。

第2報告、岡本真希子会員（國立成功大學）「早稲田の政治・言論文化と近代台湾」では、早稲田大学出身者が台湾と本国とを交錯しつつ展開した政治・言論活動を、主に内地人に焦点を当てながら検討した。具体的には、「官僚天国」台湾の官界では早大出身者は傍流に位置していたことを確認したのち、台湾在住の早稲田大学校友会の軌跡を早大野球団・早大総長の来台などを交えながら検討し、本国との交流の中で次第に形成され高揚してゆく校友意識を確認し、最後に、在野精神や世論への働きかけおよび「民権論」といった早大のスクールカラーが植民地台湾と向き合った実践の過程を、2人の校友とその主要なメディア（唐沢信夫と『新高新報』。神田正雄と『海外』）を対象に分析した。

コメンテーターの後藤乾一会員（早稲田大学）からは、両報告では「近代台湾」という用語が使用されているが、これは「日本統治＝モダニティ」あるいは「逆説の国民国家」形成期（呉密察）とでも言うべき視点が通底しているのか、朝鮮史ではこうした用語使用は可能かという点、紀旭峰報告に対して、従来の安部磯雄研究に対し新生面を切り開いたこと、早稲田で台湾に関わった者が同志社大学出のクリスチャンだった事実をもっと掘り下げても良いテーマであること、朝鮮・台湾・中国からの留学生および知識人の間に「知的、政治活動での交流圏」が形成され、それに早稲田関係者が関与していた事が興味深い点、『亜細亜公論』の進歩性には留保が必要であることなどが指摘され、岡本報告に対しては、校友会の分析により新事実発掘や外地ワセダナショナリズムの高揚を明らかにしたが、『早稲田学報』の校友会便りの利用が不足している点、台湾ジャーナリズムの発展における早稲田人といったテーマの可能性が指摘された。また、両報告を通して見た「交錯」の結果、台湾に関して早稲田に「遺産」として残され、継承されたものは何だったのか、日本における台湾認識・研究にいかなる影響を持ったのかという問題が提起された。

コメンテーターの若林正文会員（早稲田大学）からは、両報告の関係につき紀報告＝「植民地が早稲田にやって来る」／岡本報告＝「早稲田が植民地にやって来る」という分業になっているが、両者の重層的な交錯にはさらに検討の余地があること（例；台湾における台湾人・日本人校友の関

連というような、「同じ場」における交錯の有無）、早大総長・野球団の来台は早大校友のナショナリズム高揚にとどまらず、1923年の皇太子の行啓の事例のように、帝国の中心のシンボルの来台による「中心の認知を得る」という機能の一部を担うものである側面を持つ可能性があること、両報告はほぼ同時代の空間的な横の広がりにおける交錯を描いているが、戦後のコロニアリズムが早稲田との間に介在しない時代における交錯はどのようなものか、脱植民地化の時代も含めて時間の縦軸もを考慮した検討も必要であること、などの問題提起がなされた。

なお参加者は25名だったが、時間配分の関係から質疑応答や討論ができなかった。記して陳謝いたします。

第5分科会

「台湾化する中華民国」における中国的シンボルの政治的効用（1972-2011）」

企画責任者：野嶋剛（朝日新聞）、家永真幸（東京大学）

第五分科会「台湾化する中華民国」における中国的シンボルの政治的効用（1972-2011）」は、会員の野嶋剛（朝日新聞）、家永真幸（東京大学）の2人を企画責任者・報告者として座長を若林正文会員（早稲田大学）にお願いして行われた。

企画の趣旨としては、中華民国体制の維持を基本姿勢としながら、政治、社会などあらゆる面で「台湾化」が進展する台湾において、中華民国にとって「中国」を象徴する宣伝材料となるべき「故宮」や「パンダ」というテーマにおいて、政治の場においてどのように取り扱われ、シンボルとしての効果が発揮されたのかを検討した。

野嶋は「故宮文物をめぐる台湾政治の揺れ」について、2000年の政権交代において、「国立故宮博物院」の定義が元の「中華」「一元文化」から「アジア」「多元文化」に変わり、2008年の政権交代で再び「中華」「一元文化」に戻った経緯から、故宮の政治シンボル性を解説した。これに対し、コメンテーターの松金公正会員（宇都宮大学）からは民進党政権下で行われた故宮改革がその後の国民党政権でも継続性を持っている部分があるのではないかと、との指摘があった。また、会場からは台湾の人々が故宮に親近感をどこまで抱いているかどうかや、将来の日本展の可能性について質問があがった。

家永は「中国による台湾パンダ贈呈の政治的意義」について、中国にとってのパンダ贈呈の歴史

的経緯を説き明かし、台湾に対する中国のパンダ贈呈の政治的効果を説明した。コメンテーターの石川誠人会員は、台湾においても中国のシンボルとしての役割を期待され続けた故宮博物院の文物に比して、パンダはそのような重要性を帯びなかったことを指摘した上で、台湾へのパンダ贈呈は台湾の対中観を変えたのか、コマーシャリズムによってパンダの国籍問題は超克されたのか、といった質問を行った。会場の林成蔚会員は、報告者が「ミュージアムの思想」を援用して台湾の対外政策を分析するのは1990年代に流行した「レジーム論」の手法であるが、これではパンダ贈呈問題における馬英九政権の「玉虫色」の対応の説明がつかなくなると指摘し、同問題は国家表象とナショナリズムの問題として扱うべきではないかと提起した。

「故宮」「パンダ」という近づきやすいテーマ設定もあって、両報告に対して総じて活発な討議が行われ、今後台湾研究における様々な「シンボル」を通じて、中華民国体制や台湾化の実態を探り出す研究が行われることを期待し得る形となった。

第6分科会

「台湾と沖縄をめぐる国際社会の変容と越境する人びと」

企画責任者：何義麟（国立台北教育大学）

本分科会の企画の狙いは、戦前から戦後にかけての東アジアにおける社会変動の歴史を台湾・沖縄間における「人の移動」という観点から捉えなすことを通して、東アジアにおける大国間の「周辺」という従来の研究での位置づけだけでは回収されえない台湾・沖縄の独自性を浮かび上がらせることで、東アジアにおける国際社会の多様性の一端を解明し、さらには東アジアにおける国際秩序のオルタナティブなあり方の可能性を議論することであった。こうした課題に基づいて、戦後沖縄へ引揚げた在台湾沖縄出身者が沖縄社会の「戦後」復興にどのようにコミットしていったのか、また戦前から戦後にかけて沖縄へ渡った台湾人が沖縄社会においてどのような位置づけを獲得することになったのかをそれぞれ二人の報告者より発表をいただくことは今回の中心課題と役割分担であった。

分科会の冒頭、座長の泉水英計（神奈川大学）により、戦後の東アジア国際社会における台湾と沖縄の関連性について、問題点の整理がなされ、本分科会の見取り図が示された。午前の第一報告、泉水英計「ジョージ・H・カーと沖縄人移民—台

湾引揚からポリビア植民へ—」の概要は、以下の通りである。戦後の台北で米国副領事となったジョージ・H・カーは、引揚の遅れで困難に陥っていた沖縄人難民を援助した。1950年代に在沖米軍が推進したポリビア入植の事業計画への関与にはこの経験が影響している。彼が親交を結んだ在沖沖縄人指導者は帰島後も社会的地位を得て、やがて沖縄研究に訪れたカーと再会することになる。彼等は、また、植民地下の台湾で金閨丈夫などの日本人学者と沖縄研究のネットワークを形成していたが、戦後に日本の沖縄調査を再開したこのような元在島の学者たちとも再会することになった。米国の極東研究者の活動や台湾から引揚げてきた日本人学者の働きによって、戦後分断された台湾と沖縄は、依然として地下水脈のような繋がりが保たれていた。

午前の第二報告、大浜郁子（琉球大学）「沖縄出身の台湾教育経験者たちの戦前と『戦後』復興」の概要は次の通りである。「戦後」の沖縄は、沖縄戦で多くの師範学校生を失い、教育の「戦後」復興に教師の確保が急務であった。そのような状況下で、終戦によって台湾から沖縄へ引揚げてきた台北師範学校をはじめとする師範学校を卒業した沖縄出身者たちは、沖縄での教育の「戦後」復興に教師として携わったものが多かった。報告では台北師範学校の学籍簿を用いて、明治期から大正期までの同校の沖縄出身卒業生の総数を明らかにし、さらに同校で教師であった屋良朝苗と学生であった名城政雄という異なる台湾教育経験を持つ二名を事例として取り上げ、彼等の戦前と沖縄の「戦後」復興へのかかわりを明らかにした。特に、同報告では、沖縄出身の台湾教育経験者たちによる「戦後」沖縄の教育への関与は、「外から沖縄を客観的にみることのできる沖縄人」の存在という意味で、沖縄の「日本復帰」運動につながる、沖縄の「戦後」復興に重要な役割を果たしたことが指摘され、この点が沖縄の「戦後」史における課題の一つとして強調されていた。

二人の報告について、コメンテーターの楊子震（筑波大学）から出されたコメントの概要は以下の通りである。泉水報告には、戦後初期に行われた沖縄人の移動に台湾引揚とポリビア植民がある。両者はともに沖縄の日本における特有の位置と、軍事支配という米国との関係を反映するものであったが、ジョージ・H・カーはもっとも決定的な役割を果たしたのかをもう少し具体的に論証すべきなのではないか。大浜報告は、名城と屋良には「台湾教育経験者」という共通点の他はないといっても過言ではないと述べているが、名城と屋良の経歴を検討すると、両者とも日本帝国の支配圏

で活躍しようと考えていたとみなすこともできる。沖縄人の渡台動機を考察する際に、「帝国臣民としての沖縄人」という視点からの検討も可能ではないか。フロアからは、泉水報告に対して、南洋群島から沖縄引揚者が大きな割合を占めるので、彼等の沖縄の戦後復興へのかかわりをも重視すべきなのではないかという指摘や、大浜報告に対しては、大変良い問題提起であり、報告者が台北師範学校の沖縄出身者の終戦までの総数を明らかにする研究計画であると聞き、今後の研究進展を期待しているとの発言などがあった。

午後の第三報告、水田憲志（関西大学）「戦後琉球政府時代の石垣島における台湾系住民」の概要は次の通りである。1930年代から戦後初期を経て、1972年までの琉球政府時代に至るまで、多くの台湾系住民は八重山諸島の石垣島に移住し、主にパイナップル産業に従事し、八重山の経済発展に大きく貢献した。報告者は台湾系住民の戦後、台湾と八重山との間に国境線が引かれ、石垣の台湾系住民は「外国人」としての不安定な地位におかれたが、地元社会に同化しつつ、台湾とのつながりを維持することにより、台湾系住民ならではの優位性を保持していたと結論付けた。

午後の第四報告、八尾祥平（首都大学東京）「琉球華僑総会の政治社会的分析」の概要は次の通りである。1970年代琉球華僑総会は、沖縄の日本復帰後の生活への不安を解消するための場として民衆によって「自然発生」的に設立されたものではなく、むしろ、正式な外交関係のない沖縄において自国の影響力を高めた国府や国民党の強い働きかけと深く結びついていたがゆえに設立された側面が強いことが明らかになった。しかし、その後、琉球華僑総会は国府の意図とは別にして、多様性の問題を抱えつつも、琉球華僑をつなぐ組織であった点は評価すべきだと結論付けた。

午後の二人の報告について、コメンテーターの何義麟（台北教育大学）から出されたコメントの概要は以下の通りである。水田報告には、地理学者の専門を生かし、独自に作成した地図を使いながら、なぜ台湾系住民はパイナップル産業の開発に成功したのかという理由を説明されたが、台湾系住民の成功を明らかにするためには、本土から農業開拓者の失敗原因をもっと詳しく説明する必要があるだろう。また、戦後石垣島の労働力が本土へ流出し、台湾からの労働力と技術が導入されたという労働力の連鎖移動にも言及すべきなのではないか。八尾報告は、社会学研究者でありながら、台湾側の公文書などの一次史料を掘り出し、さらに新聞記事や統計資料を活用し、聞き取り調査をも加えて大きな課題を解明したと評価できる。ただ

し、これは台湾のセンシティブな政治立場の問題が絡んでいるため、公文書の解読はもっと深い読み込み作業が必要ではないかと指摘された。

当日の会場において、参加者は20名前後で活発な議論が展開された。時間の制限上、フロアからの質疑応答を全て受け付けることはできなかったが、検討すべき課題については、セッション終了後も会場の内外で報告者と参加者との意見交換が行われた。本企画のもうひとつの狙いは、従来の台湾研究・沖縄研究の枠組みを超え、歴史学・人類学・地理学・社会学といった異なるディシプリンにおける最新の研究成果について相互に発表を行うことで、これまで直接議論されることが少なかった各国の研究者を結びつけ、新たな研究者ネットワークをつくりだすことにあった。今回の分科会は、台湾と沖縄を架橋する研究に取り組んでいる研究者のネットワーク構築への布石を打つという大きな一歩を踏み出したといえよう。

第7分科会

「親族から考える台湾漢族社会の特質 中国、韓国との比較を通して」

企画責任者：上水流久彦（県立広島大学）

本分科会は、台湾の漢人社会における父系血縁の役割とその特徴を父系社会と認識されている中国、韓国との比較を通して明らかにすることを目的に東京外国語大学三尾祐子の司会のもと実施した。親族関係は人類学研究の主要なテーマで、台湾漢族社会においても姓や財産の継承等で重要な父系血縁を中心に研究が行われてきた。だが、複雑化した現代の台湾漢族社会において父系血縁が律する領域は限定的であり、台湾漢族社会を理解する上で、父系血縁を中心とした親族関係を研究する意義が改めて問い直されている。

最初に東北大学の川口幸大が「現代中国において父系出自でつながること ―華南の村落社会からの視点」と題し、珠江デルタ地域の村落の事例から、現代中国における父系親族、とりわけ宗族のつながりと諸活動の特徴を指摘した。①1949年以前のように経済的な資源は持たず、また直接的には政治機関と関わっていない、②祖先祭祀等の活動が村落および上位レベルと4世代から5世代前までの近祖を対象としたものに二極化しており、その中間の分節レベルでのつながりは顕在化していない、③成員たちは出自のつながりを回路に集うことで、アイデンティティの充足を果たしている、という三点である。

続いて県立広島大学の上水流久彦が「親近感を語るための道具としての台湾漢族の『同姓』」と題し、台湾漢族において最も遠い親族である同姓の者どうしの関係を事例として、同姓トンイズム（同姓の者どうしが同姓であることから互いを特別な関係であると考えること）を論じた。同姓の関係は親しさと相互扶助で説明されるが、そこからは親族関係が①人間関係を生み出すための道具となっていること、②複雑な関係を受け入れやすい説明にするモデルになっていること、③能力や競争原理とは別の原理で動く領域を提供していることが明らかとなった。

三番目に日本学術振興会／東京外国語大学の横田祥子が「少子化時代における『房』の存続：台湾漢族の事例より」と題して報告を行った。横田は台湾漢族が父系的系譜関係を存続させるために、継承者としての男子が誕生しなかった家が、婿入り婚や養取など、さまざまな救済措置を取ってきたことを1950年代以降の具体的事例を元に紹介した上で、今日少子高齢化が急激に進行する中で、そうした救済措置が用意されてきたにも拘わらず、もはや系譜関係の存続はさほど重視されなくなっていることを論じた。

最後に日本女子大学の西村一之が「台湾東部漁民社会における漢族の父系親族原理の持つ意味—漁撈集団の形成と維持を例に」のタイトルのもと、台湾東部の漁民社会に着目し、労働（漁撈）を共にする集団の形成とその維持において、父系親族原理がどのような位置にあるのかを考察した。漁撈集団の形成においては、様々な因子を活用して関係が形成され、この時、父系親族原理に基づく父—息子関係や父によってつながる兄弟関係は、台湾漁民社会において個別的で意味のあるものとして認識されていることを指摘した。

コメントとして東洋大学の植野弘子は主に少子化、「偏娘家化」（妻の実家との関係の密接化）の中での親子関係の変化、母方、妻方親族の漢族社会における重要性を指摘し、父系血縁が父系社会においていかなる文脈においても優先的に機能するわけではないという意見を述べた。続いてソウル大学校の嶋陸奥彦は、韓国との比較という観点から、韓国の漁村における親族観念や祖先祭祀は農村とは異なること、同姓ではなく同郷が移住者を結びつける装置となっていること、都市化や国際化を通じて婚姻の形態が変化し後継者の確保並びに祖先祭祀の継続が困難になっていること等を指摘し、川口発表については宗族復興と村落の政治構造との関係を問うた。フロアからは大陸の移動漁民との比較、台湾における国際結婚の傾向、報告事例の台湾全体への普遍化の可能性、同姓結

婚などの現状、姓と「骨（親子のつながりを示すサブスタンスとしての）」の継承の違い等について意見や質問が出された。

これらのコメントや質問に対して、台湾漢族漁民の場合は父系親族原理が発現する機会は薄いが存在しないわけではないこと、漁撈集団の形成において最も重視される要因は漁撈技術であること、少子化が台湾漢族の家族、親族の形成に多大な影響を及ぼす問題であり、今後も注視すべき課題であること、同姓結合の利己的利用は普遍性が見られることなどが発表者からリプライされた。全体的には台湾漢族の社会では韓国、中国に比べて父系イデオロギーが相対的に弱い可能性、少子化などの社会的変化のもと家族観・親族観の共通した変化（娘の家族内における地位の向上、役割の重要性など）が台湾、韓国、中国で進行していることが確認された。

第8分科会

「社区総体营造の現在 都市と農村から考える」 企画責任者：星純子（法政大学）

第8分科会では、「社区総体营造の現在 都市と農村から考える」と題して星純子（法政大学）「地域政治に介入する社区総体营造—高雄市美濃区における県市合併の初歩的考察—、河口充勇（東京女学館大学）「トップダウンからボトムアップへ？—新竹市における社区营造の経験と課題—」の2報告が行われた。参加者は報告者、コメンテーターを含め9名であった。

まず星報告は、1990年代以降の社区総体营造政策を用いて台頭したコミュニティの社会運動が、県市合併でゆれる地域政治に参入する様子を、台湾南部の高雄市美濃区を例に検討した。内容は以下の通りである：美濃では、社会運動が農村の変容や強固な血縁ネットワーク、および名望家—地方派系—地方派系個人化と変遷したローカルレジームの中で生まれた。そして、運動が民主化や台湾ナショナリズムからの支持、さらに社区総体营造政策の資金を得て拡大および制度化し、いったんは地方派系の支配する地域社会から卓越化した。しかし県市合併や一連の地域社会再編にともなう政策面や集票の競争力強化のため、地域政治アクターは社会運動の知識を必要とし、社会運動も事業の深化やローカルレジームのポスト削減から、地域政治アクターへの接近を政策提言や選挙宣伝という形で強めた。ここに地域政治アクターのメンツや選挙宣伝力を社会運動が保つかわりに、社

会運動が地域政治アクターを用いて運動に正統性や実行力を付与するという交換関係が成立した。星報告に対し、コメンテーターの松本充豊会員(天理大学)は、1、美濃の地方派系の崩壊を報告のとおりに1980年とするなら、これが台湾全体に先駆的現象であることを実証するべき、2、地方派系崩壊後のレジームは「地方派系個人化レジーム」という名前でもいいのか、3、県市合併後、ポストが減っただけで、ローカルレジームに変化はなく、あいかわらずその本質は「外部資源導入」なのでは、と問題提起した。

河川報告は、新竹市を事例に、社区營造のトップダウンからボトムアップへの変化を報告した。内容は以下の通りである：新竹は工業化、外省人の流入、1970年代以降の新竹科学園區など国策下でのハイテク産業地区化にともない、大きな社会変化を遂げた。その社会変化の中で発生した環境汚染に対し、同市のハイテク産業や有名大学に集積した流動的高学歴層が抗議を行い、市民運動の基礎が成立した。1990年代には新竹市文化センターがトップダウンで社区総体營造の資源を用いて社区營造を行ったが、政府機関と民間団体の提携不調のため、2000年以降社区營造は停滞した。ここに、市民運動の基礎から生まれた自発的ネットワークの「竹ほうき聯盟」がボトムアップで地域の歴史発掘や市政府の文化アセスに参入し、社区營造はトップダウンからボトムアップへと変化している。河川報告に対し、コメンテーターの佐藤幸人会員(アジア経済研究所)は、1、そもそも社区総体營造とは何か：同政策にとって地域社会の歴史はどれだけ必要なのか、活動の根拠はどれだけ内発的(ボトムアップ)でなくてはならないのか、2、そもそも社区とは何か：大きさはどうか、3、社会運動と地域社会の関係はどうか：園區の人がどれだけ「竹ほうき」に参加しているのか、例えば台湾のハイテク産業が成熟する中、富の追求から離脱するエンジニアが現れてきているが、彼らが社区營造に参加していくようなことはないのか、と問題提起した。

フロアの参加者からは、日本のNPOやまちづくりといった用語の対比からの質問、社区營造団体の正統性、報告事例の代表性の問題などが提起された。小規模の分科会ではあったが、政治学、経済学、歴史学、社会学などの多様な方法論で、研究のみならず実務の面からも社区総体營造を論じる有意義な分科会であった。

第9分科会(自由論題報告・文学)

座長：星名宏修(一橋大学)

本分科会の報告者は、県立広島大学の下岡友加氏と早稲田大学のムイニー・マシュー氏のふたりである。前者のコメンテーターが赤松美和子氏(大妻女子大学)、後者が豊田周子氏(関西学院大学)であった。

「董さん」や「紫陽花」、そして「蟹」「豚」など、近年黄霊芝の作品を集中的に研究してきた下岡友加氏は、報告「黄霊芝の日本語小説『輿論』」において、戒厳令施行直後の1950年代を背景とした小説『輿論』が描いたものは、当時の台湾社会の不安定さだけでなく、ある殺人事件の犯人像をめぐる輿論を形成しつつ同時にその輿論に右往左往する民衆の無責任なあり方であると言う。また予稿集には書かれていないが、当日配布された資料によって、この作品が1963年5月の『群像』新人賞の予選通過作品であることが提示された。

「ディスプレイメントとリフラクションー周金波の作品にみるモダニティ」と題するムイニー・マシュー氏の報告は、文化人類学者であるジェイムズ・クリフォードが20世紀の旅行を論じた際に使用した「ディスプレイメント(転地)」という概念を用いて、周金波の小説『郷愁』を分析したものである。周金波に関する伝記的研究や作品の実証的な検証をここでは目指すわけではないというマシュー氏は、小説の主人公「私」を作者自身と重ね合わせることによって、ディスプレイメントによって生じるアイデンティティの動揺は、「コロニアルかつ近代的な空間に帰郷したため」であると結論づけた。

第10分科会(自由論題報告・言語学／人類学)

座長：三尾裕子(東京外国語大学)

本セッションは、ともに、日本植民地期に行政官でありつつ、学術研究を行った2名の研究者に関する考察であった。

田中梓都美会員(関西大学)の「官」と「民」、二つの視点よりみる伊能嘉矩の台湾調査活動ー伊能の著作を中心にーでは、伊能嘉矩の調査研究について、「官＝総督府雇員」と「民＝人類学者・歴史学者」という立場を区分した上で、その立場性が、書かれた論考にどのように反映されているのかを考察した。田中によれば、伊能の調査目的や調査方法から考えれば、伊能が「官」と「民」との立場の相違によって、異なる調査を行ったわけではなく、また書かれたものも首尾一貫していたことが判明した、ただ、伊能には、調査結果を求める側、即ち台湾総督府と東京人類学会夫々の

欲する情報を報告したという側面があったため、結果として、報告内容に差異が生じたという。このことから、伊能の「官」と「民」の二面性は、本人が創出したものではなく、周囲が作りだしたものであると結論付けた。

本報告に対して、コメンテータの小林岳二会員（自由ヶ丘学園高校）は、発表者が、従来の研究において、伊能の調査の限界性が指摘されていることから、この限界性を「官」と「民」という立場の二面性から論じるとしているが、そもそもその「限界性」とは何なのか、また「官」と「民」という二面性から論じることが有効か、といった点について疑問を投げかけた。

林初梅会員（大阪大学）による「小川尚義の言語学とその時代—日本「内地」の視点からみた台湾諸言語採集・調査活動」では、小川尚義の台湾諸言語研究に焦点を当てながら、戦前の台湾や日本「内地」における植民地言語研究が如何に認識されてきたかを考察した。その結果は以下の3点であった。第1に、小川や同時代の日本「内地」の言語学者や民俗学者の研究は、国家イデオロギーや植民地主義との関わりで批判されることが多いが、むしろ、台湾諸言語については、日本語との関連にはさほど着目しなかった。第2に、小川が追及したのは、高砂族諸言語とインドネシア語との系統論で、その際用いた手法は、東京帝国大学のお雇い教師フローレンツや、東洋学者ガーベントを範としていた。第3に、小川の高砂族諸言語研究は、日本本土との共通性探しよりも、南方の異文化への探求を志向していたが、日本語の南方起源説に結び付く可能性も秘めていた。

林会員報告に対しては、コメンテータの土田滋会員（中央研究院）から、小川の「ツォウの昔話」からの「これは、本源は同一であったのが、時と処を異にするに従って異なったことをあらわすようになったのではないか」という思想であろう。」という引用は、小川自身の考察による推論とは思われないので、小川に日本語と高砂族諸言語との関係性があるという観点があったことを指摘するのは問題がある、などといったコメントがあった。

第11分科会（自由論題報告・社会学／国際関係） 座長：佐藤幸人（アジア経済研究所）

第11分科会では、呉俐君会員の「戦後沖縄本島における台湾系華僑——一世の移住過程を中心に」と、近藤久洋会員の「台湾の対外援助——援助戦略の一貫性と援助戦術の変容」という2つの報告がおこなわれた。佐藤が座長をつとめ、松本

充豊会員と川島真会員がそれぞれに対する討論者となった。参加者は報告者や討論者を含め、約20名だった。

呉報告はなぜ戦後に多くの台湾人が沖縄に赴き、そこに定住することになったのかという問題を提起し、それと国家の政策や国際関係との関連性を検討した。呉報告は結論として、留学を出国の主たる目的としていた他地域と違って、沖縄への出国の目的の多くは就労であったこと、その背景には中華民国政府による派遣事業があったことを明らかにした。また、彼らの多くが沖縄に留まった理由は、台湾の国際的な地位の不安定化であるとした。

松本会員は台湾研究と沖縄研究の接点となりうると報告の意義を評価した上で、移住者の台湾における境遇など台湾側のプッシュ要因、沖縄側の定住を促すプル要因を問うた。呉会員はこれに対して、移住者個人については経済的動機が強かったこと、沖縄側では労働力不足が生じていたことなどを回答した。フロアからは今回用いた外交部の資料のほかに、経済部の資料も有用であるというコメントがあった。

近藤報告はまず「DAC 援助モデル」を一種の紳士協定として整理し、それを踏まえて台湾がどのような援助モデルを構築してきたのか、それほどのような要因に基づいていたのかという問題を設定した。近藤報告は第1の問いに対する回答として、台湾が現実主義的なモデルからDAC 援助モデルへ、すなわち理想主義的なモデルへ移行しつつあることを示した。第2の問いに対しては、国家性の維持が援助の主目的であることは一貫しているものの、近年のモデルの変化はそれへのアプローチの変更として理解できるとした。

川島会員はまずパイオニア的な研究であると報告を評価し、次に以下のようなコメントをおこなった。台湾を中国など先進国にとって懸念のある新興ドナーと同列に扱う見方は一般に存在しないのではないかと。国家性の追求は説明要因になり得るのか。DAC モデルへのシフトは「外交休兵」が前提となっているのではないかと。つまり発展段階的にシフトを論じられるのか。援助の受け手は台湾の変化を歓迎しているだろうか。外交部の役割を過度に重視していないか。フロアからは、分析の視角として援助史、国際関係、国際開発が混在している、援助する側とされる側のバーゲニングにも目を向ける必要がある、国家以外の援助主体の重要性が増しつつあるというグローバルな潮流を考えれば、援助モデルが成熟すればするほど、国家性の追求という台湾の目的との間に乖離が生じることになるなどの指摘があった。

分科会の議論は充実し、建設的であった。2人の報告者の研究のさらなる深化が期待される。

第12分科会（自由論題報告・歴史学） 座長：松田京子（南山大学）

第12分科会では、歴史学分野の自由論題報告として、2つの報告が行われた。まず、顔杳如氏（行政院国家科学委員会）は「越境する女—高橋鏡子の満蒙、台湾経験と国家意識」というテーマで、一人のエリート女性・高橋鏡子の移動の軌跡と「外地」経験をとおして「帝国」が拡張していく過程で女性が果たした役割を考察するという意図のもと、具体的には、1920年代前半の蒙古、1920年代中頃から1930年代前半の台湾、1930年代後半の「満州」での高橋の生活経験を紹介した上で、「外地」経験によって培われていく高橋の人脈のあり方、さらに高橋のなかの国家意識の変化を詳細に論じた。それに対して、コメンテーターの洪郁如氏（一橋大学）より、「帝国」内部の人的移動に関しては、官僚など男性の動向が中心的に論じられている研究状況の中で、エリート女性に焦点をあてた本報告の研究史上の意義が指摘された一方で、帝国史研究、とりわけ帝国女性史研究のこれまでの研究蓄積に対して、本報告はどのように応答する準備があるのか、その点をもっと明確にすべきではないかという問題提起がなされた。

次に、富田哲氏（淡江大学）は「日本統治期台湾をとりまく情勢の変化と台湾総督府翻訳官」のタイトルの下に、1900年に台湾総督府に設置され日本統治期をとおして存続した翻訳官というポストに着目し、その職務上の性質の変化を時間軸に即して詳細に分析した。具体的には、翻訳官の「活躍」の場の多くが、日本帝国の「外」すなわち「南支」「南洋」との関係において見出されることが指摘され、さらに台湾をとりまく情勢の変化によって、翻訳官の性質も、①統治初期の「清国通」、②大正南進期以降の「南支」「南洋」の専門家、③1920年代以降の台湾社会の監視役と変化していく様相が報告された。それに対して、コメンテーターのやまだあつし氏（名古屋市立大学）より、日本帝国の「外」に対する翻訳官の役割についての本報告の指摘は興味深い、高等法院の奏任官通訳との関連性など日本帝国の「内」すなわち特に台湾社会に対する役割についても、もっと重視すべきではないか、また官僚制研究の一環として翻訳官研究を位置づけるのであれば、翻訳官の官等の分析が必要不可欠だと思われるという指摘がなされた。

第13分科会（自由論題報告・政治学／宗教学） 座長：渡辺剛（杏林大学）

*第13分科会の記事は、お原稿を頂戴できず発行に間に合わなかったため、掲載できておりません。ご了解をお願いいたします。（編集）

台湾研究情報

「原住民族飲食文学與文化国際学術研討会」 に参加して 垂水千恵（横浜国立大学）

2011年5月27、28日の両日、国立中央大学中国文学系および台湾飲食文化協会主催による「原住民族飲食文学與文化 国際学術研討会」が台湾師範大学国際会議場において開催された。

これは『完全強壮レシピ：焦桐詩集』（池上貞子訳、思潮社、2007）で日本でも知られる詩人の焦桐こと国立中央大学中国文学系副教授・葉振富氏による「飲食文学国際学術研討会」シリーズ3回目の企画である。ちなみに2007年開催の1回目のテーマは「飲食文学與文化国際学術研討会」、2009年開催の2回目のテーマは「客家飲食文学與文化国際学術研討会」であった。

『完全強壮レシピ：焦桐詩集』、原題『完全壯陽食譜』はまさにその名が示すように、料理レシピの形を取った詩ではあるが、料理の対象は単に食物に限らず、歴史・政治・性と全ての素材を飲みこむ、偉大な胃袋のような詩集である。日本でも訳者の池上貞子会員や三木直大会員の尽力によって、このラブレリックの詩人の業績が知られるようになってきていることは誠に喜ばしいことである。もっとも、焦桐氏はその「食えない」詩だけでなく、正真正銘のグルメとしても有名であり、台湾の「年度餐館評鑑」つまりはレストラン審査員として、数多くのレストランガイドも出版している。さらには『暴食江湖』『台湾味道』などの随筆にも健筆を振っている。

特に後者は「米粉湯」「大腸蚵仔麵線」「虱目魚」「肉圓」など、書いているだけでも生唾が沸いてくるような台湾の「小吃」をめぐる文章が並ぶ名著で、吉田健一の『私の食物誌』、壇一雄の『壇流クッキング』にもひけを取らないのではないかと

思う。これを台湾に取材し、写真付きで翻訳する、などという文字通り「おいしい」仕事の依頼はないか、などと思わず妄想してしまう。

さて、話がそれたが、学会報告に戻ろう。シンポジウムにおける報告内容は考試院委員・浦忠成氏の「原住民族飲食伝説」に始まり、「試論清代方志中台湾原住民族飲食文化」、「阿美族巫師飲食文化」、「野東西—台湾当代原住民族漢語書写中的飲食圖像」など、台湾原住民族関係の論文が並ぶのは当然のこととして、「原住民族飲食対巴西美食文化的影響」、「墨西哥原住民族飲食文化與禁忌及其影響」などのラテンアメリカのインディオに関する報告や、「苗家酢宴」など、中国少数民族に関する報告など多岐にわたるものであった。食べたことも見たこともない食物を、中国語の描写から想像するのは難しいが、苗族の「酢類」とは一種のなれ鮓のようなものなのであろうか、と思いつつ報告を聞いた。残念ながら 28 日の日本台湾学会 13 回学術大会に出席するために、ちょうどこの報告の途中で退席せざるを得なかったのだが、報告者の二毛氏（苗族）は文筆活動の傍ら、北京で四川料理の創作レストランも開いているということなので、いつか訪れて、確かめてみたいと思う。

では、お前は何を報告してきたのか、と言われると恥ずかしいのだが、初めて台湾とは無縁な在日文学における飲食文化の表象についての報告をした。具体的には梁石日の『夜を賭けて』における飲食文化の表象、あからさまに言えば「焼肉」の描写を開高健の『日本三文オペラ』、小松左京の『日本アパッチ族』における食物描写と比較しての報告であった。50 年代に大阪兵工廠跡に出没した「日本アパッチ族」を題材としたこの 3 作の比較は研究者の執筆欲を刺激するところがあるらしく、これまでも少なからぬ論文が書かれている。もし焦桐氏の依頼がなければ、敢えて挑戦しなかった題材だと思うが、「飲食文化」という切り口を与えられて見ると、実に興味深く、書いていて楽しい論文であった。要旨をかいつまんで説明すると、梁石日の『夜を賭けて』（1994）は、かつて自らのアパッチ体験を開高健の『日本三文オペラ』（1959）によって「盗まれて＝食われて」（この二つ動詞が隠語として繋がるどころが『日本三文オペラ』の秀逸さであることは、この作品を読んだ方ならみな同意して下さると思うが）しまった梁石日がもう一度「盗み＝食い」返す物語である。そのため、『日本三文オペラ』においては過度に強調された肉食描写を、梁石日は批判的に相対化しようとする。しかし、『夜を賭けて』が梁の全面的協力を受けて金守珍によって映画化された時、再

び肉食描写が強調されてしまうことのアイロニーを、間テクスト性に着目して論じたものである。もっとも、「原住民族飲食文学與文化」というテーマとの関連を問われると苦しいところであり、原住民族をマイノリティと解釈して、日本におけるマイノリティとしての在日文学、ということで繋げるしかないのだが、そこには当然ずれが生じる。改めて「原住民族」という概念の難しさに思い当たった経験ともなった。

ただ、以前、瓦歴斯・諾幹（ワリス・ノカン）について論じた時に感じたことだが、原住民族作家が中国語による創作を行う時に生じる言語の脱領域化の問題は、在日文学に通じるものがある。では、今回私が論じた「民族」表象をめぐる間テクスト性の問題などが、原住民族作家と漢族作家の作品間に生じることはないのだろうか？ 或いは、原住民族文学が「原住民族」文学であるために、過度な「民族」表象に陥ってしまう、といった問題は生じないのだろうか？ など、新たな疑問が沸くに至り、その意味でも刺激になったシンポジウムであった。

しかし、何といっても残念であったのは、会場確保の関係で学会日程が変更となった結果、前述のように日本台湾学会 13 回学術大会と日程が被ってしまい、この学会のメインイベントであり、実を言うと私がこの学会に参加を決めた大きな動機であった「原住民族」に出席できなかったことである。これは、詩人であり、かつ飲食文化研究家である焦桐氏プロデュースによる原住民族創作料理のフルコースであり、それぞれの料理には詩人による命名がなされている。食べるもののかなわなかったすばらしい宴席のメニューを見ることくらい悔しいものはないが、最後にそのメニューを紹介して、その悔しさを会員の皆様と分かち合うと同時に、これほどの宴席を諦めて日本台湾学会に出席した学会への「emotional attachment」をアピールしておきたいと思う。

彭巴草原的秘密、阿里山日出、鬼頭刀跳舞、勇士出征、鱒魚深呼吸、山中伝奇、野鴨物語、原野二重唱、公猪娶親、母鷄唱歌、山海戀、祖靈的眼睛、祖靈的呼喚…

さて、その内容が想像できますか？

続いて第 20 号の特集「五都選挙をめぐる」へのリプライをご紹介します。（編集）

**「特集『五都選挙』をめぐる」読後感
松本充豊（天理大学）**

台湾の政治の動きはとにかく速い。そう感じられるのは、毎年のように重要な選挙が行われるせいかもしれない。「総統選挙の前哨戦」といわれた昨年11月の「五都選挙」もその一つであり、前号の特集にはこの五都選挙の観察記録が寄せられていた。ここでは来年に迫った総統選挙の話題と絡めながら、同特集に対する筆者の読後の感想と思うところを述べさせていだきたい。

来年1月には4年に一度の総統選挙がやってくる（今回は立法委員選挙との同日選挙）。すでに総統選挙モードに突入している台湾では、五都選挙ももはや「過去の選挙」なのかもしれない。しかし、「狭義の政治学を専攻されていない」会員による4篇の選挙観察を読み返してみると、いずれも個性に溢れ、その内容はいまなお新鮮である。政治学者を自称する筆者にとっても大変興味深く、総統選挙をウォッチするうえで大いに示唆に富むものであると改めて感じられた。

鈴木賢会員の「五都選挙を現地で観察して」と野嶋剛会員の「民進党の選挙キャンペーンについて」は、それぞれ法学者と記者の立場からの観察記録だが、随所に散りばめられた現地体験が当時の状況を生き生きと伝えてくれている。屏東半島の様子やそこに暮らす人々の声からは「南北の断層の深さ」を感じ取ることができた。民進党の選挙CMの描写は、目を閉じてそれを想像するだけで、同党がこれまでとは「違う」ことを感じさせてくれた。

陳文松会員からの「五都選挙 現地観察報告」は、台湾在住の会員による文字通り現地の視点に立った観察記録であり、南投県草屯鎮での鎮長補欠選挙の詳細なレポートなど日本では得難い情報が詰まっている。台湾の若い世代が政治への関心を再び高めつつあるという、陳会員個人の体験を踏まえた指摘はとても貴重なものといえよう。

山崎直也会員の「教育から見た五都市長選挙」は教育学者による一味違った選挙観察であった。特に教育問題、利益集団の動きといった切り口から五都選挙の特徴を浮かび上がらせた点は極めて斬新である。正直なところ選挙戦の流れや選挙の結果に目を奪われがちな筆者などは大いに反省を迫られた。民主化後の利益集団のあり方、あるいは二度の政権交代を経験したなかでの利益集団と政府、政党との関係などは、実は政治学者がほとんど手をつけられていないテーマなのである。

五都選挙で最も印象的だったのは、民進党が党勢の回復に成功したことであろう。五都の市長・議会選挙の結果、そして上述の草屯鎮長補欠選挙での勝利によって、一時は再起不能かに思われた民進党はその「復活」を内外に強く印象づけた。

それはもはや国民党にとって脅威といえるレベルに達している。総統選挙は現職の馬英九総統と民進党の蔡英文主席による「双英対決」となることが決まったが、目下のところ馬氏と蔡氏のほぼ互角の争いと伝えられている。総統選挙では接戦が予想されるが、それも民進党の復活あってこそのことである。

蔡氏の擁立を決めた民進党では、野嶋会員が指摘したブルーとグリーンの対立を煽ることなく、「中間層」ないし中間選挙民へ訴えかける選挙運動が引き続き展開されることになった。ただ、蔡氏が避けて通れないのが対中政策である。蔡氏を迎え撃つ馬氏は「92年コンセンサス」を選挙アジェンダに取り上げている。これは中台双方が「一つの中国」について達成したとされる合意で、双方は「一つの中国」を掲げつつも、その内容はそれぞれで解釈するというものである。馬英九政権と国民党にとっては、92年コンセンサスを政治的な前提および基礎とした中国との関係改善が最大の実績であり、台湾への経済効果をアピールしたいところである。92年コンセンサスなど存在しないとの立場を崩さない蔡氏と民進党に対し、それを受け入れなければ中国との関係が不安定な状況に陥ってしまうと馬氏は批判する。

台湾の政党システムは二大政党化しているはずなのだが、総統選挙となると中国共産党を加えた「兩岸三党」が重要なアクターとなる。共産党は、92年コンセンサスが失われたら兩岸関係の改善と発展など語りようがないと民進党を牽制しており、国民党に「加勢」する格好となっている。そうしたなか、蔡氏は「和而不同」（和解しながら相違点を残す）、「和而求同」（和解しながら共通点を求める）という対中政策の方針を打ち出している。抽象的な表現ながら、中国との対話の余地を見出そうとする姿勢がうかがえる。

総統選挙の選挙戦も中盤に入り、今後は両候補者から具体的な政見が示されることになるだろう。対中政策が最大の争点となることは間違いないが、山崎会員が指摘するように、教育に関する政見がどのような形で示されるのかも観察の重要なポイントの一つであろう。また、有権者の動きとして、陳会員が指摘した「民心思変」が結果にどう反映されるのかも大いに気になるところである。総統選挙でも馬英九政権への不満が民進党への支持に直結すれば、その論理的帰結として政権交代の可能性は高まる。その一方で、五都選挙が地方レベルの選挙だったからこそ「民心思変」を素直に表明できた有権者にも、国政レベルの総統選挙ではそうもいかないといったところがあるかもしれない。

ところで、今回の五都選挙を通じてブルー・グリーン両陣営から次世代の国政を担う人材が出てきたという鈴木会員の観察は、将来的な五都選挙の位置づけ、および総統選挙との関係を見据えるうえで注目すべき重要な指摘である。選挙サイクルが4年で一致しているため、総統選挙の1年数ヵ月前には必ず五都選挙が行われることになる。総統の座をめざす有力政治家たちがこうした選挙日程を念頭に置いて行動することは間違いない。またこれまでは台北市長のポストが総統への登竜門とみなされてきたが、今回の選挙結果からも台北市を除く4つの市長ポストの重要性が大きく高まったことは明らかである。今後、五都選挙の結果が各党の総統候補争いに大きく作用することになろう。

今回の五都選挙や一昨年の県市長選挙のように、地方首長を選ぶ選挙は住民が自らの手で「小さな」総統を選ぶ選挙とみることができる。もっとも小さな総統である県市長は地方レベルでの行政権を独占しているという意味でアメリカの大統領のような存在である。他方、国政レベルの総統は半大統領制の下で行政院長（首相）と行政権を分有しており、むしろそれはフランスの大統領に近い。ここにアメリカの大統領のようなリーダーをイメージする住民の理想と総統の現実の姿とのあいだにズレが生じる可能性があるが、それはまた総統選挙が終わってからの話である。

何はともあれ、総統選挙まであと数ヵ月となった。政治家にとって権力への近道である総統選挙は、住民には民主主義のシンボルそのものである。彼らにとっては総統を自らの手で選ぶことこそ民主主義なのである。一昨年の県市長選挙、昨年の五都選挙でいわば「予行演習」を終えた台湾の人たちにすれば、来年の総統選挙は満を持しての「本番」といったところだろうか。

日本台湾学会活動報告

日本台湾学会定例研究会
(歴史・政治・経済部会) 活動状況
張士陽 (早稲田大学)

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会)
第 63 回

日時: 2011 年 5 月 18 日 18:20~20:30

場所: 早稲田大学早稲田キャンパス 9 号館 309 教室

報告者: 日下部 龍太 (早稲田大学大学院教育学研究科博士課程)

報告タイトル: 台湾総督府初等教科書が描く族群別の社会観形成—「漢人」・「平埔族」・「高砂族」の三教科書の比較を通して—

共催: 早稲田大学台湾研究所

【概要】

日本統治下台湾において、初等教育用の国語(日本語)教科書は「漢人」「平埔族」「高砂族」それぞれに異なったものが用いられていた。これらの教科書中の道徳教材を分析した結果、教科書が意図した族群別の社会観形成は次の通りであった。まず漢人には勤勉を奨励するとともに、他の族群に対する優越感情を許容する内容となっていた。平埔族には根性を強調したものが用いられ、高砂族に対しては現状否定を強調し、他人に害を及ぼさないようにするという育成目標が読み取れる内容となっていた。これらを総体的に観察すると、日本はいずれの族群に対しても第二位の地位を保証することで、それぞれの反発が起きないようにしていたと考えられる。この後の質疑では、日本人用の教科書も比較対象とすべきであるとの指摘があったほか、編集プロセスを追うことで教科書の目的の歴史学的根拠を見いだせるのではないかとこの指摘があった。参加者は 18 名。

記録者: 鶴園裕基 (早稲田大学大学院政治学研究科修士課程)

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会)
第 64 回

日時: 2011 年 6 月 15 日 18:20~20:30

場所: 早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 502 教室

報告者: 星純子 (法政大学サステナビリティ研究教育機構)

報告タイトル: 現代台湾コミュニティ運動の地域政治への参入—高雄市美濃区における民主化、社区総体營造、リスケーリング

共催: 早稲田大学台湾研究所

【概要】

台湾における社会運動は、87 年の戒厳令解除にともない活性化し、民主化と台湾化の中で成長し、制度化していった。台湾の地域社会運動は、文化の実体化政策である社区総体營造の補助金を受けて台頭し、台湾文化に関する高度な知識を用いて

いったんは地域社会の政治対立に巻き込まれた住民や政治アクターから卓越化した^が、地域社会のリスケーリングや運動の深化にともない、地域政治に再び参入している。92 年末から始まった高雄市美濃区のダム反対運動は、先に指摘した過程を経て卓越化した^が、それは地域政治レジームの流動化や、伝統社会のネットワークなどの「環境」に規定されていた。その後、卓越化への反省や補助金を出す政府側の変化を受け、再び地域の政治へ参入し始めている。質疑において、地域社会運動の再参入の政治に対する影響についての質問に対し、市議会、県議会のレベルにおいて集票の性質に変化が現れている、との返答があった。参加者は 10 人。

記録者：鶴園裕基（早稲田大学大学院政治学研究科修士課程）

台北定例研究会 担当幹事 富田哲（台湾・淡江大学）

第 56 回台北定例研究会

日時：2011 年 4 月 2 日（土）15:00

場所：淡江大学台北キャンパス D303 室

報告者：顔杏如（国科会人文学術研究中心博士後研究員）

テーマ：「島都」意象—在台日本人的都市空間書寫」

コメンテーター：蘇碩斌（陽明大学人文與社会科学院）

使用言語：北京語

第 57 回台北定例研究会

日時：2011 年 6 月 11 日（土）15:00

場所：淡江大学台北キャンパス D208 室

報告者：許時嘉（名古屋大学学術研究員、台湾大学台湾文学研究所博士後研究員）

テーマ：「近代文體成形過程中「傳統」文體的變異：漢詩文的自我相對化與再生」

コメンテーター：藍弘岳（交通大学社会與文化研究所）

使用言語：北京語

学会運営関連報告 担当理事 松金公正（宇都宮大学）

【第 6 期理事会常任理事会第 5 回会議議事録】
（抄）

日時：2010 年 11 月 20 日（土）

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 8 階会議室

1. 冒頭に新しく事務局を担当することになった伊関浩巳氏より自己紹介があった。

2. 理事長より、2010 年 11 月 5～6 日に開催された中央研究院社会学研究所主催の国際フォーラムに日本台湾学会を代表して、春山明哲理事長、三尾裕子会員、林成蔚会員が参加した旨報告があった。

3. 財務担当理事より、会計処理に関し、インターネットバンキングへの移行を進めており、今年中に完全移行の予定である旨報告があった。

4. 編集委員長より、学会報の編集に関し、第 13 号には、16 本の投稿論文があった旨報告があった。また、投稿論文の中に来年の研究大会で発表する内容と重なる可能性があるものがあり、対応が必要との意見が出された。

5. 文献目録担当理事より、文献目録に関し、10 月 21 日現在、登録数は 8968 件、入力作業は家永真幸会員に依頼している旨報告があった。

6. 関西西部会研究大会に関し、台湾史研究会との共催で、2010 年 12 月 8 日に関西大学で開催する旨報告があった。

7. 広報担当理事および学会ウェブサイト担当監事より、学会ウェブサイトリニューアルにかかるコンセプトおよび掲載するコンテンツに関する紹介が行われ、承認された。

8. 総務担当理事より、国立情報学研究所のサービス停止に伴い、現在使用しているサーバーが 2012 年 3 月に使えなくなるため、レンタルサーバーの移転先を早急に考える必要がある旨報告があり、検討の結果、WADAX の提供するサーバーに移転する方向で検討することが承認された。

9. 財務担当理事より、第 12 回学術大会決算案について報告があり、承認した。

10. 第 13 回学術大会に関し、実行委員会より、現段階の状況について報告があった。

11. 第 13 回学術大会の分科会企画・自由論題報告についての提案があり、原案の通り承認した。企画数は最大 17 セッションとなるが、3 部制を採用することによって対応可能との説明があった。なお、学会報への投稿論文、関西研究部会における報告とのテーマの重複については、企画委員会より、発表者へ注意喚起をすることが確認された。

12. 第 7 期理事選挙について、関係書類の発送は 2011 年 1 月 20 日（木）、投票締め切りは 2011 年 2 月 16 日（水）とし、開票は 2011 年 2 月 24 日（木）に関西大学において行い、立会人は山本和之会員とする旨報告があった。

13. 選挙関係書類には会員一覧のほか、会員名簿も同封することが確認された。

14. 日本台湾学会賞の選考に関し、委員長の若林正文会員のほか、選考委員は、松本充豊会員（政治分野担当）、星名宏修会員（副委員長、文化・文学・言語分野担当）、笠原政治会員・張士陽会員（歴史・社会分野担当）で構成し、経済分野は掲載論文がないため、選考委員も置かない旨報告があり、原案の通り承認した。

15. 若林正文理事より、台湾研究所プロジェクト「日本の大学における台湾研究関連の教育の実情と課題」の調査において、台湾学会会員名簿を使用したい旨依頼があり、学会として協力することとした。

16. 次回常任理事会は2011年3月5日（土）14:00から早稲田大学において開催することが決定された。

【第6期理事会常任理事会第6回会議議事録】
（抄）

日時：2011年3月5日（土）

場所：早稲田大学22号館5階510室

1. 学会賞選考委員長より、第6回日本台湾学会賞の選考の経緯と選考結果について報告があり、受賞論文（案）が提案され、原案の通り承認された。

2. 理事長より、「台湾研究国際フォーラム」への参加および同フォーラムの今後の展望について報告がなされ、同フォーラムの延長として来年1月に開催される「台湾研究世界会議」への日本台湾学会からのパネル参加についての提案があり承認された。

3. 三田裕次会員からの寄贈資料について報告がなされた。

4. 会費未納会員に対する働きかけを強化することが確認された。

5. 財務担当理事より、学会に対する早稲田大学からの経費支援について、学会の活動経費支援について承認を得た旨報告があった。

6. 編集委員長より、『日本台湾学会報』第13号編集の経過報告がなされた。

7. 目録担当理事より、目録件数についての報告がなされた。2011年2月18日現在、登録は9089件。

8. 総務担当理事より、選挙管理委員会から送られた第7期理事選挙の結果について報告があった。有権者数497のうち、有効投票82、無効5、当選者は30名。

9. 広報担当理事より、2011年2月1日付で学会ウェブサイトのリニューアルした旨、報告がなされた。

10. 国立情報学研究所のサービスに代わるレンタルサーバーへの移行が必要であるため、前回の常任理事会において業者は決定されていたが、どの料金プランを選択するかなど具体的内容に関する審議要請がなされ、50Gのプランで、汎用ドメイン.jpを申請することが決定された。

11. 第13回学術大会の準備状況について、実行委員会より報告があった。

12. 第13回学術大会予算について、財務担当理事より、大会予算案が報告された。

13. 次回常任理事会は2011年4月9日（土）15:00から早稲田大学で開催することが決定された。

【第6期理事会常任理事会第7回会議議事録】
（抄）

日時：2011年4月9日（土）

場所：早稲田大学22号館8階会議室

1. 理事長より、東日本大震災に関し、震災後の学会ウェブサイトへのメッセージ掲載、および常任理事、会員等の安否確認について報告があった。

2. 第13回学術大会について、実行委員会より、準備状況について報告があった。

3. 編集委員長より、『日本台湾学会報』第13号の進捗状況の報告があった。

4. 理事長より、第14回学術大会について、一橋大学の松永正義会員から開催を受け入れる意向があった旨報告があった。

5. 財務担当理事より、若林正文理事からの寄付は一般会計に組み込まず、学会賞の賞金として全額使い切るまで充当する旨提案され、承認された。

6. 理事会の日程について、学術大会初日の2011年5月28日10:00より第6期第3回理事会を、10:45より第7期第1回新理事会を開催することとした。

【第6期理事会第3回会議議事録】（抄）

日時：2011年5月28日（土）10:00-10:45

場所：早稲田大学22号館8階会議室

1. 春山明哲理事長より東日本大震災に対する台湾からの震災見舞いに対する謝意が示された。

2. 春山明哲理事長より若林正文理事からの寄付金についての謝意が示され、学会賞副賞の賞金とする旨、報告がなされた。

3. 各担当理事からの第6期の活動に関する報告の主要な点は以下の通り。

*2010年度末における会員数は一般会員393名、学生106名、計499名。

* 2010 年度の会費納入率は 47.3%。

* 学会誌第 13 号には 16 点の応募論文があり、審査の結果 6 本を掲載。

* 第 13 回大会の分科会企画には 8 企画、自由論題には 10 名の応募があり、審査の結果 7 企画、10 自由論題が採用。

* ニュースレターを第 20 号まで発行。

* ホームページを大幅に改定。

* 文献目録のデータベースには、2011 年 5 月 9 日現在、9180 件が登録。

* 各定例研究会より報告があった。関東部会からは、第 53～63 回が開催され、うち 9 回は早稲田大学台湾研究所ワークショップとの共催であったこと、関西部会からは、台湾史研究会との共催で、2010 年 12 月 18 日（土）に関西大学において第 8 回関西部会研究大会が開催されたこと、台北部会からは第 53～56 回が開催されたことが報告された。

4. 2010 年度決算案について審議し、拍手にて承認した。

5. 春山明哲理事長から、2 期 4 年間の総括、および挨拶がなされた。

【第 7 期理事会第 1 回会議議事録】（抄）

日時：2011 年 5 月 28 日（土）10:45～12:00

場所：早稲田大学 22 号館 8 階会議室

1. 理事長の立候補または推薦が募られ、春山明哲理事長が山口守理事を推薦し、拍手をもって満場一致で承認された。

2. 山口守理事長より副理事長と常任理事（10 名）の推薦がなされ、駒込武副理事長および各常任理事の選任が承認された。

3. 任期を残して理事に選出された洪郁如幹事の後任監事の任期については、残任期間の 1 年とすることが承認された。

4. 会計監査の推薦が募られ、松金理事より岸川毅会員と菅野敦志会員を推薦する旨、提案があり、上記 3. を踏まえ、岸川会員を 2 年任期、菅野会員を洪監事の残任期間（1 年任期）の会計監査として総会に推薦することが承認された。

5. 山口守理事長より 8 名の会員に幹事を委嘱する旨の報告があった。

6. 山口守理事長より、第 7 期の業務体制が報告され、承認された。

7. 第 13 回学術大会予算案が提案され、承認された。

8. 2011 年度予算案が提案され、承認された。

9. 第 7 期第 1 回会員総会の議案について提案され、承認された。なお、会員総会の冒頭において震災被災者に対する黙祷を行うことが確認された。

10. 第 14 回学術大会について、一橋大学で 2012 年 5 月 26 日（土）に開催することが承認された。開催校を代表して、松永正義理事より挨拶がなされた。

11. 山口守理事長から若林正文理事からの寄付金についての謝意が示され、学会賞副賞の賞金とする旨、報告がなされた。

【第 13 回大会総会議事録】（抄）

日時：2011 年 5 月 28 日（土）17:00～17:45

場所：早稲田大学小野記念講堂

司会：石垣直

議長：五十嵐真子

書記：田上智宜

1. 北波道子選挙管理委員長より、理事選挙の報告があった。2011 年 2 月 24 日に関西大学で開票を行い、有効投票者数は 82 名、当選者 30 名。

2. 2011 年 5 月 28 日、第 7 期第 1 回理事会が開催され、山口守理事が第 7 期の理事長に選出されたことが報告された。

3. 山口守新理事長による就任の挨拶、春山明哲前理事長による退任の挨拶が行われた。

4. 山口守理事長から若林正文理事からの寄付金についての謝意が示され、学会賞副賞の賞金とする旨、報告がなされた。

5. 各業務担当理事および幹事より活動状況の報告があった。

* 総務担当理事より、第 6 期では、2011 年 3 月の会員数が 499 名（一般 393 名、学生 106 名）であることが報告された。

* 財務担当理事より、2010 年度の会費納入率が 47.3%であることが報告された。

* 編集委員長より、第 13 号には 16 点の応募があり、審査の結果 6 本が採択されたこと、また記念講演が掲載されることが報告された。

* 企画委員長より、第 13 回大会の分科会企画には 8 企画、自由論題には 10 名の応募があり、審査の結果 7 企画、10 自由論題が採用されたことが報告された。

* 広報担当理事より、ニュースレターの 18～20 号を発行したこと、ホームページの大幅改定を行ったこと、及びサーバーを今年度中に移行する予定であることが報告された。

* 目録担当理事より、震災の影響で遅延していたが、5 月にアップし大会現在 9180 件であり、月に平均 6000 件以上のアクセスがあることが報告された。

* 国際交流担当理事より、中央研究院社会学研究所主催の台湾研究国際フォーラムに学会を代表して 3 名が参加したこと、2012 年 4 月に開催予定の

台湾学会世界会議にも学会から報告パネルを推薦する予定であることが報告された。

*各定例研究会より報告があった。関東部会からは、第53～63回が開催されたこと、関西部会からは、2010年12月18日(土)に関西大学において第8回関西西部会研究大会が開催されたこと、台北部会からは第53～56回が開催されたことが報告された。

6. 会計監査より、2010年度会計について適正に処理されているとの監査報告がなされた。

7. 2010年度決算の報告があり、原案のとおり承認された。

8. 2011年度予算案の報告があり、原案のとおり承認された。

9. 理事会より、会計監査の選任に関し、岸川毅会員を推薦するほか、洪郁如会計監査が任期途中で理事に当選したため、残任期間1年の会計監査として菅野敦志会員を推薦する旨の提案がなされ、原案のとおり承認された。

10. 第14回学術大会の開催校である一橋大学の所属の松永正義会員より、2012年5月26日(土)に開催する旨と、多数の参加の願いがあった。

日本台湾学会第7期運営組織

◎理事長：山口守(日本大学)

◎副理事長：駒込武(京都大学)

◎理事：浅野豊美(中京大学)、植野弘子(東洋大学)、小笠原欣幸(東京外国語大学)、何義麟(国立台北教育大学)、笠原政治(国立民族博物館)、川上桃子(アジア経済研究所)、川島真(東京大学)、河原功(東京大学/日本大学)、呉密察(国立成功大学)、洪郁如(一橋大学)、黄英哲(愛知大学)、駒込武(京都大学)、近藤正己(近畿大学)、佐藤幸人(アジア経済研究所)、澤井律之(京都光華女子大学)、下村作次郎(天理大学)、垂水千恵(横浜国立大学)、陳培豊(中央研究院)、春山明哲(早稲田大学)、藤井省三(東京大学)、星名宏修(一橋大学)、松金公正(宇都宮大学)、松田康博(東京大学)、松田吉郎(兵庫教育大学)、松永正義(一橋大学)、三尾裕子(東京外国語大学)、三澤真美恵(日本大学)、山口守(日本大学)、やまだあつし(名古屋市立大学)、若林正文(早稲田大学)(五十音順、計30名)

◎常任理事：川島真、駒込武、佐藤幸人、下村作次郎、垂水千恵、松金公正、松田康博、三尾裕子、三澤真美恵、山口守(計10名)

◎幹事：朝元照雄(九州産業大学)、北村嘉恵(北海道大学)、張士陽(早稲田大学)、富田哲(淡江大学)、沼崎一郎(東北大学)、前田直樹(広島大

学)、松岡格(早稲田大学)、山崎直也(国際教養大学)(計8名)

◎総務：垂水千恵

◎事務局：伊関浩巳

◎会計財務：三澤真美恵

◎学会報編集委員：佐藤幸人(委員長)、河原功(副委員長)、小笠原欣幸、上水流久彦(県立広島大学)、澤井律之、張士陽、門間理良(文部科学省)

◎企画委員：三尾裕子(委員長)、星名宏修(副委員長)、朝元照雄、野間信幸(東洋大学)、洪郁如、松本充豊(天理大学)

◎広報：松田康博、前田直樹(ニュースレター担当)、山崎直也(ホームページ担当)

◎定例研究会：張士陽(関東)、澤井律之(関西)、富田哲(台北)

◎文献目録：松金公正

◎国際交流：川島真

◎理事会書記：松岡格

◎第12回大会実行委員：松永正義(委員長/一橋大学)、委員(未定)

◎学会賞：藤井省三(委員長)、委員(未定)

◎会計監査：菅野敦志(名桜大学、2011年度)、岸川毅(上智大学、2011年度～2012年度)

◎選挙管理委員：未定

… 編集後記 …

・学術大会特集を開催の余韻の残っているうちにお届けするため、大会特集号は本号から8月に発行することになりました。いわゆる諸般の事情で発行が遅れましたことをお詫びします。

・「台湾研究情報」と「学会・シンポジウム等参加記」への積極的なご投稿をお待ちしています。

(前田直樹)

日本台湾学会ニュースレター 第21号

発行：日本台湾学会(代表 山口守)

発行年月：2011年8月

■日本台湾学会事務局

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学政治経済学術院 若林正文研究室気付

E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒739-8525 広島県東広島市鏡山1-2-1

広島大学大学院社会科学部 前田直樹研究室気付

E-mail: JATSNewsletter@gmail.com